

「ん……」

いつの間にか、眠ってしまったみたい。

車窓に映る自分の表情は曇ってこそいないが、頭の片隅では現実の時間軸が多少気になる。親は、友人は、心配していないだろうか？

——時間軸がリンクしていたらどうしよう。

探し回っていたら……自分の身よりも、周りの心情や行動が気になる。心優しい彼女だからこそ、のんびりはしてられないと奮起した。隣で先程の自分のように眠っている彼を起こさないよう、静かながら強く自らの頬を両手で叩く……ペチ、と可愛らしい音がした。

「頑張ろう」

最早、口癖。彼女は、この魔法の言葉で何度も立ち上がってきた。

「青柳くんの為にも」

言葉や行動は前向きでも、こうして眠ってしまうく

らいには、心にも身体にも負担が掛かっている。夢中になると、彼は自分の異変に気付けない。こはねは仲間として、恋人として、見てきたから知っている。

——以前、セカイで倒れてしまったと聞いた。それ以来、気を付けてはいるみたいだけど。今はきつと、そんな余裕がない。隣で私を支え、元気づけることに全力を注いでくれている。勿論、元の場所に戻る方法やヒントを探すことにも。

「……私も同じか」

眉を下げながら笑い、サラサラの髪を無意識に撫でた。ハッ、として手を引っ込めつつ、今度はドキドキと鼓動が速まる。

——不可抗力とはいえ、二人きりでこんな遠出なんて。

高校生の自分達には早すぎる展開。たった今、早く帰らなくちゃ、と改めて決意を固めたばかりなのに。

「大丈夫だ、小豆沢……」

隣で発された言葉に、目を丸くする——夢の中でも、私のことを。

「……ありがとう。青柳くん……」

もう少しだけ、このまま。そう言う代わりに、手を重ねた。電車が止まるまでは、思わせて。

——ガタンッ。

大きな揺れによって、二人同時に目覚めた。寄り添って眠っていたのか、目を開けた瞬間の距離の近さに驚いて即座に離れる。お互い真っ赤な顔を隠すようにそっぽを向いた。

「す、すまない、いつの間にか眠ってしまっていたようだ……」

「わ、私も……」

冬弥は本音だが、こはねは咄嗟に嘘をついてしまった。本当は、一度起きたのだけど。黙っておこう、と決め深呼吸する。

「ここは……?」

「入ってみよう」

電車を降りてすぐ目の前に建っていたのは、ドーム。光り輝いているからか、白い。遥かに小さいが、見た目は自分達の世界にあるアーティストの聖地に似ていた。

「静かだね……」

「ああ」

先程の場所とは違い、音楽は掛かっていない。足音と、二人の声のみ反響する。建物の中にいるのに、外にいるよう。真っ暗で、ちょっとだけ。

「怖いかも……」

こはねが思わず口にした言葉を、冬弥は聞き逃さなかった。本日何度目かの「大丈夫だ」を告げて、今度は、彼から手を握る。こはねは、自分だけが知っている冬弥の恋人に向ける優しさに微笑んだ。

「わっ……!?!」

突如、明かりがつき、暗闇に慣れようとしていた目

がチカチカする。視界が落ち着く頃、悟った。

「写真展……？」

壁に一定の間隔を空けて写真が連なっている。まず目に入った写真は、笑顔が眩しい他でもないこはね自身。その隣にある写真は、楽しそうに歌っている冬弥だった。そして、更に隣には、お互いの相棒が自分達を褒めている様子が見てとれる四人の写真。続々と連なる写真にはこはねと冬弥それぞれの家族、共通の友人、そして、同じ志を持つ仲間達が「いい顔」をして写っていた。二人だけだと思っていたセカイに写真とはいえ大切な人達が現れて、こはねと冬弥の表情はみるみる柔らかくなっていく。

「さっきまでいた場所が俺の想いでできたセカイだとしたら、ここは小豆沢の想いでできたセカイだろうな」
「……そっか、写真……それに私、みんなのこういう表情が大好き」

ここに足を踏み入れた時は、覚悟を改めたとはいえ、

不安な気持ちが残っていたように思う。青柳くんに声を掛けられ、手まで繋いでもらったことで安心できたから、明かりが灯ったのかも。みんなの事を考えたから、写真としてだけど現れてくれた……ここは、あまりにも自分の想いに正直な場所だ。

「ここから先は、違うエリアになっているみたいだ」
「……進もう」

角を曲がった瞬間、目に飛び込んできたのは。

「俺の写真が、たくさん……」

「こ、これはっ！ そのっ！」

顔が赤くなってしまふ。

「青柳くんが好き」という想いが写真となり、現れてしまった。

こはねにはわかる。写真に写っている冬弥の瞬間、一つ一つを「好きだなあ」と想ってきたのだから。

「……ふふ。小豆沢の想い、伝わってきた」

「こ、怖くない……？」

「まさか。寧ろ、嬉しい。こんなにもしっかり見ても
らえていたことが」

嘘をついているように思えない。

たった今、新たな写真が現像されたに違いなかった。

「また、別のエリアが」

「い、いい行こう！」

広い背中を押して先を促す。次にどんな写真が待ち
構えていたとしても、このエリアよりは恥ずかしくな
い！

「……え？」

「どうした？」

「……この人達のこと、私、知らない……」

こはねは疑問を浮かべた。

写真に写っている人達はみんな笑顔だ。けれど、誰
一人知らなくて。この人達の写真が現れた理由がわか
らない。でも、なんだか、部屋の温度が上がったよう
に感じる。あたたかくて……まるで「見守っているよ」

と、包んでくれているような。

「そういえば……」

——これまでも、思い当たらない節はあった。

最初にいた花畑や、帽子の中にある枯れない花。こ
れと同じ花卉に導かれ、新たな場所に足を踏み入れた。
芝生迷路やレンガ造りの町、私達を運んでくれる不思
議な電車……思い当たらないことは思い当たらないこ
ととして、全てが繋がっているような予感がする。

「これは……！」

「えっ!? な、何? 青柳くん！」

考え事をしていたせいで驚いて、大きな声を出して
しまった。これが実際の写真展だったら、大迷惑に
なってしまう。

「見てくれ……！」

「あ……！」

先程のライブハウスから出てくる時に貰ってきたフ
ライヤー。結局、こはねの分も冬弥が預かっていた。

背中を押されたことでポケットから落ち、拾おうとした所で目を見張った——絵柄が、変わっている。それはライブ用のフライヤーではなく、写真展のポスターになっていた。

「……あのね、青柳くん。私の考えを聞いてくれるかな？」

真っ直ぐな目をするこはねを見て、冬弥は頷いた。

今さっき導かれた結論を、順序立てて話す。

「……なるほど」

「このフライヤー……ポスターもだけど、次の場所へのヒントを私達は毎回、得ていたのかも」

「……最初は花卉が道標か。芝生迷路とレンガ造りの町は」

「青柳くんの想いでできたセカイに繋がってる気がする。私、芝生迷路を見た時は『不思議の国のアリス』、道に落ちてる花卉を辿った後は、まるで『ヘンゼルとグレーテル』のパンみたいって思ったんだ」

「本繋がり、か……レンガ造りの町も、今思えば、幼い頃読んだ本に似たシチュエーションがあった気がする」

「元いた場所に帰りたかって想いから、私達の世界にある電車が移動手段になってるのかも！」

互いの推理が、パズルのピースのように綺麗に嵌っていく。

「……私、思ったんだ。想いが強ければ、必ず元場所に辿り着ける。不安に思うことないよ！」

「小豆沢……」

——惚れ直した。

「いや、益々、好きになったが正しいな」

強くて頭がよくて、格好良い。守るべき存在だが、それだけじゃない。自分を安心させようとしてくれているのだとわかって、愛しさが込み上げる。

告白に動揺しつつも顔を赤く染めワタワタするこはねを眺め微笑み、冬弥は言葉を続けた。

「……これは、俺がそうだったらいいな、と思ったことなんだが」

最初の花畑は、空から降る花のように「想い」が降り積もってできたセカイというヒント。

「そして、この写真の人達は『俺達を見守ってくれている人達』かもしれない」

「……だとしたら、心強いね」

——青柳くんも、一緒だったんだ。

彼の想像通り、全ての始まりとなった花畑のセカイが「私達を見守ってくれている人達の想い」で生まれたのなら。私達を元の世界へと導いてくれるのも、この人達の想いなんだろう。それに、私と青柳くんを想ってくれているなら、私達が怖いと感ずることや不安にさせるような出来事は起こらない気がする。現実世界と時間がリンクしていたら、と不安に思ったけれど、きつと……。

「この人達の想いが強かったから、俺と小豆沢はこの

セカイへと導かれた。干渉したことで、俺達の想いや願望、記憶なんかが入り交じってしまったのかもしれない……と」

「私も、青柳くんの想像を信じたいな！」

写真展は間もなく終わり。

出口と書かれたゲートを潜る前に、こはねは今一度、写真越しに見守る人達に振り返る。

「……行こう」

花のような微笑みを残して、冬弥の後に続いた。